

郷土博 通信

No.17

2021 春



『弘法大師御一代記』(解説8頁)

CONTENTS



■『弘法大師御一代記』	1	■『弘法大師御一代記』について	8
■展示室の紹介	2~3	■INFORMATION	8
■混同された古墳と荻田元広資料	4~7		

第1展示室

(展示期間：4月～9月)

江戸時代の貨幣 寛永通宝を中心に

江戸時代に入り、徳川幕府は金貨・銀貨・銭貨を基本通貨(いわゆる三貨)と定めて全国に流通させました。金貨は大判・小判、銀貨は豆板銀・丁銀、銭貨は元和通宝・寛永通宝・天保通宝・文久永宝などがあげられます。

ここでは、寛永通宝を中心に見ていきたいと思います。

寛永通宝は、1636(寛永13)年に江戸の芝、近江坂本(滋賀県)の2か所の銭座で鑄造されたのが最初ですが、翌年には、全国での流通促進のため、水戸・仙台・三河吉田・信濃松本・越後高田・長門萩・備前岡山・豊後竹田でも銭座が設置されました。通用単位は1文でした。

江戸時代以前から存在した銭貨の流通方法で、寛永通宝の流通以降も見られたのが「銭さし」もしくは「九六銭」と呼ばれるものです(写真①)。一文銭96枚を麻紐に通して100文として通用しました(写真は96枚×2セット=200文として通用)。少額貨幣の枚数を数える手間を省き、持ち運びしやすくなったのです。4文の差額は、銭さしを作る手数料分として差し引いたという説があります。



▲①銭さし=九六銭

1768(明和5)年、表面はこれまで同様の寛永通宝ながら、1枚で4文として通用する四文銭が登場しました。1文銭と区別できるように、裏面には波線21本(②)がデザインされましたが、鑄造時に型抜きがしにくいという理由で、翌年以降は波線11本に改められました。

明治を迎えるまでの長い期間、日本の各地で多種多様な寛永通宝が造られました。4文字の書体の特徴の違い(③)や、裏面に刻まれた鑄造場所を示す「佐(佐渡)」「仙(仙台)」「千(仙台)」「小(江戸本所小梅、④)」「足(下野足尾)」「久(常陸久慈)」「長(肥前長崎)」「十(江戸深川十万坪)」などの文字の有無など、一枚一枚を注意して観察するといろいろなことがわかります。

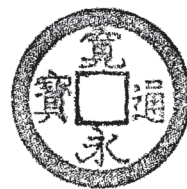
今回の展示では、江戸時代の貨幣制度を概観しながら、意外にも身近に存在する寛永通宝などの古い銭貨を小さな歴史的資料・美術品として、見て楽しんでいただきたいと思います。(齊藤 祐司)



▲②寛永通宝
四文銭(表裏、背21波)
直径2.7cm



▲③-1 寛永通宝(表)
「虎之尾寛」
直径2.5cm(部分拡大)
※③-1は、「寛」の最終筆画が
虎の尾のように跳ね上がっている。



▲③-2 普通の「寛」
直径2.4cm



▲④寛永通宝(表裏)
「小(江戸本所小梅)」
直径2.3cm

第3展示室

(展示期間：4月～9月)

讃岐の中世瓦 ー西部ー

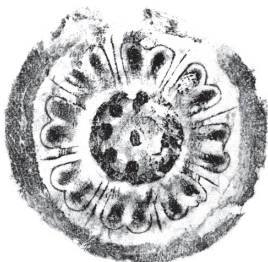
屋根材として長く使われてきた粘土瓦は造形しやすいため、軒瓦や鬼瓦、^{のきがわら}鴟尾、^{し び しやちほこ}鯨などさまざまな瓦が屋根を飾ってきました。なかでも軒丸・軒平瓦は、文様の変遷や製作の痕跡をたどることで、その建物の社会的背景や当時の技術をうかがい知ることができます。古代の瓦は研究が進んではいるものの、中世については今まであまり注目されてこなかったため、館蔵資料を中心に概観してみようと思います。

日本における初めての瓦葺きの建物は、約1400年前に創建された飛鳥寺(奈良県明日香村)とされています。初期の瓦は寺院、藤原京など都の宮殿、^{かんが}官衙にしか使用されませんでした。やがて瓦を使った建物は全国へ広がっていきました。特に寺院で多く使われ、当時使用された古代軒丸瓦の文様はほとんどが蓮華文です。

ところが古代から中世へ時代の変化とともに、瓦の文様にも大きな変化が現れました。軒丸瓦の文様の主流が、それまでの蓮華文から巴文となっていくます。どうして巴文が瓦の文様として採用されたのか、明確な理由は不明ですが、水の渦巻きを表していると解釈され、火災除けともいわれています。香川県西部において、善通寺のような古代から続く寺院から出土した軒丸瓦を観察してみると、平安時代後期頃を境に蓮華文(①)から巴文(②)へ変化したことが分かります。巴文のほかに数は少ないのですが、^{ほうくんじ}法興寺(丸亀市飯山町)などから梵字文が、^{せんしゃくじ}船積寺跡(三豊市詫間町)からは丸菱文(③)といった文様も確認されています。

^{おおみなかみ}大水上神社(三豊市高瀬町)や加茂神社(多度津町)からは蓮華文の軒丸瓦が出土していることから、古代の終り頃からお寺に続いて神社でも瓦が使用され始めていたのではないかと考えられます。さらに中世末頃の^{まつがはな}松ヶ端城(④)や櫛梨山城などの城跡から、わずかですが瓦が検出されており、瓦を使用する建築物は時代とともに徐々に拡大していったことがわかります。

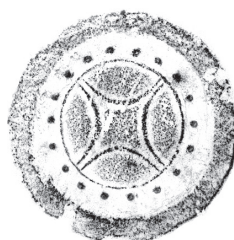
香川県西部では中世にどのような瓦が使われていたのかを、今回の展示でご覧いただきたいと思います。そして次回は、香川県東部の中世瓦をご紹介します。(宮武 尚美)



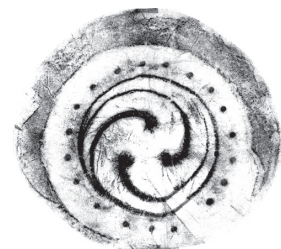
▲①複弁八葉蓮華文軒丸瓦(善通寺)
平安時代後期



▲②右巻巴文軒丸瓦(善通寺)
平安時代末



▲③丸菱文軒丸瓦(船積寺跡)
室町時代



▲④巴文軒丸瓦(松ヶ端城跡)
室町時代

※縮尺：実寸の1/4

混同された古墳と荻田元広資料

はじめに

今から100年ほど前、2基の古墳が時を隔てて調査された。そして当時としては精緻な記録がそれぞれ作成された。

ところが古墳はいつしか混同され、現在では一つの遺跡として扱われている。

なぜ、このようなことになったのか。

当館が所蔵する記録を精査すると、2つの古墳の名称が類似し混同され易かったということもさることながら、^{おぎ た もとひろ}荻田元広の几帳面な性格が関係し、調査記録の存在が見えにくくなっている点が大きなき要因のように思える。

資料の保管方法などの難しさを考えさせられる事例である。

大きな穴が開いた

坂出市高屋町の^{へんしょういん}遍照院という寺の裏山で、谷藤八という者が、幹回り90cmほどの松を切り倒したところ、根元に大きな穴が開いた。驚いた藤八は走り回り2、3人を呼び集め、一緒に恐る恐る穴の中を覗くと、いろいろな物が入っているのが見えた。

この出来事はほどなく荻田元広のもとへ知らされた。1903(明治36)年8月20日頃のことである。

荻田は、この時香川県師範学校の教諭になったばかりの27歳で、上記のような顛末を聞き取り、記録を作成した。

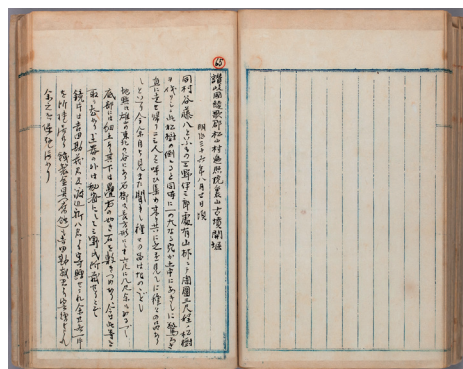
荻田の調査記録

荻田の記録には「讃岐國綾歌郡松山村遍照院裏山古墳開堀」(以下「荻田記録」という)とタイトルが付けられ、発見時の顛末を短い文章にまとめ、続いて古墳の概要が記されている(図1)。

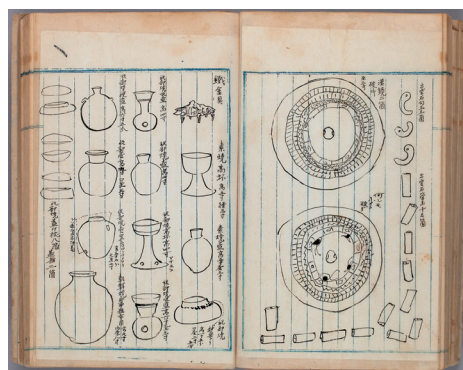
埋葬施設である石室は長方形で六尺(約1.8m)と八尺(約2.4m)の大きさで、底は細土でその下に石が敷き詰めているとある。

須恵器などの土器をはじめ、首飾りの^{まが}曲玉・^{くだ}管玉、鏡(乳文鏡)の破片2点、馬具などの出土品については、関係者から自分に寄贈され保管していると記し、特徴を上手に描写したスケッチ図(図2)が添えられている。

この記録を現代において考古学を勉強した者が見ると、石室の形状、出土須恵器の特徴などから6世紀の横穴式石室墳であるとすぐに判断でき、貴重な考古学的な調査報告となっている。



▲図1 荻田記録の説明文



▲図2 荻田記録のスケッチ図

もう1つの古墳

荻田の調査から22年後の1925(大正14)年9月、遍照院裏手でもう1つの古墳が調査されている。

調査者は鎌田共済会調査部の岡田唯吉で、この年の5月に開館した郷土博物館の職務も兼任していた。

調査の契機や目的は不明であるが、その古墳は竪穴式石槨を埋葬施設とする円墳で、調査記録(図3)と石槨の写真を残している。

調査記録には「綾歌郡松山村遍照院裏古墳」(以下「岡田記録」という)と記されている。古墳名称が荻田と異なり「山」がなく「裏」だけである点は注意を払っておきたい。

なぜならば、後述するように荻田記録と出土品はこの時点で既に鎌田共済会に寄付されており、岡田は目を通していたため重複を避けようとしたとも推測できるからである。

岡田記録

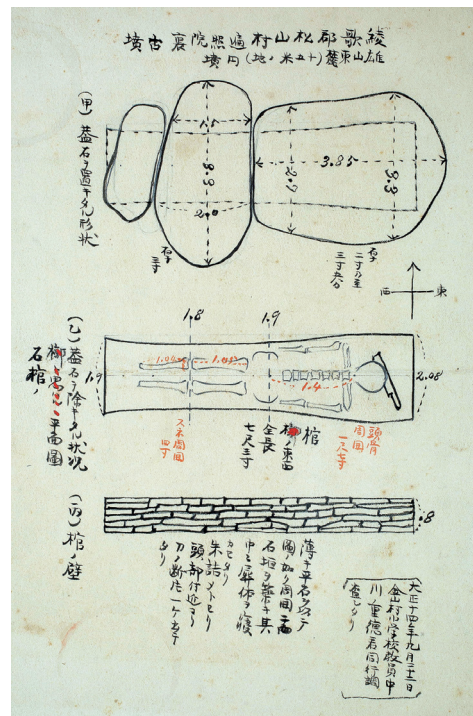
A4大の岡田記録には図が3つ描かれている。上段が蓋石の配置、中段が石槨内の人骨等の出土状態、下段が側壁図で寸法も書き加えられている。

これらの図から、埋葬施設は長さ約2m・幅0.6m前後の小形の竪穴式石槨であることがわかる。床面に敷石があったとの記述はなく、石槨写真をみても敷石は見えない。

出土遺物は、朱が付着する頭部付近から刀の断片が1点出たと記されており、中段の図は人骨頭部の下に刀の絵が描かれている。

鏡の出土は記録されていない。蓋石の整然とした配置図があることから未盗掘の古墳を発掘したと推定され、岡田の発掘前後にこの古墳から鏡が採集されたとは考え難い。

つまり、荻田と岡田によってそれぞれ記録された古墳は、埋葬施設の構造、出土遺物などからして明らかに別々のものなのである。



▲図3 岡田記録

混同のはじまり

遍照院裏山古墳は退化した小さな竪穴式石槨を持つ円墳で、石槨内からは人骨・鉄剣などとともに文様化した擬銘帯を持つ乳文鏡が出土したという。

この説明文は、約20年前の^{おんやま}雄山古墳群発掘調査報告書に書かれているものである。乳文鏡の出土は荻田の古墳、それ以外は岡田の調査した古墳内容で、見事なまでに合体されている。

この混同がいつ頃から始まるかというと、管見の限りでは瀬戸内海歴史民俗資料館が1983(昭和58)年に発行した『讃岐青銅器図録』にたどり着く。図録には遍照院裏山古墳出土の乳文鏡が収録され、それを出土した古墳については次のように説明されている。

雄山東裾の低丘陵尾根には竪穴式石室などを埋葬施設とする数基の古墳が分布する。明治30年代に尾根上が開墾され、曲玉・管玉・刀剣・馬具・須恵器・朱・貝片などが発見され、鎌田共済会郷土博物館に収容された。鏡はこれ等とともに遍照院裏山古墳出土とされている。

図録巻末の「古鏡出土地名表」において、遍照院裏山古墳の文献及び発見年欄は空白となっており、このことからすると、資料館の調査者は荻田と岡田の記録には目を通すことなく、出土地の記録が曖昧となった出土遺物のみを実見した結果、一つの古墳像を描き出していったものと思われる。

荻田と岡田の記録をなぜ見なかったのだろうか。その理由は次に述べるように、記録の存在が知られていなかったせいであろう。

荻田・岡田記録はどこだ

当館所蔵の資料については1971(昭和46)年に『資料目録』が作成されている。荻田と岡田の記録がどのように掲載されているかを見ていくと、意外な結果が待っていた。

2つの記録のタイトルは全く見当たらないのである。何度も目録をめくるうちに、『資料目録』第二部の写真欄に「綾歌郡松山村 高屋古墳 附同説明図」というものを見つけた。

古墳の名称は異なるものの同じ住所である松山村の古墳に関する資料であることから念のためにと現物に当たってみると、これが図3の岡田記録そのものであった。

さあ、次は荻田記録の探索である。荻田関係資料は幾つも掲載されているものの、例えば「讃岐考古資料集覧 荻田元広」という綴りをめくって見ても中に該当するものは含まれていない。

荻田関係資料を逐一当たる中で、『讃岐史料 雑之一』という表題が付けられた冊子の中にあることが、やっと判明した。

冊子全体は半紙大の野紙約150枚を丁寧に袋綴じしたもので、このような体裁は荻田の手になるものであろう。

内容は荻田が筆録した讃岐に関する約100項目の歴史データ集である。最初に目次があり、赤字の番号の下に墨の細字でタイトルが整然と縦書きされ、文



▲図4『讃岐史料 雑之一』写真

字に乱れがなく10頁に及ぶ。11頁以降が本文となり、例えば古代では菅原道真の漢詩の書写、江戸時代では『全讃史』などの歴史書の書名一覧、考古学分野では県内の銅鐸発見状況などが丁寧に書き留められているものの、分野別には分けられてはおらず、荻田が取り組んだ順番のままのようである。

さて、目次では7頁目に「讃岐國綾歌郡松山村遍照院裏山古墳開堀」のタイトルが書かれている。このため、目次をこまめにめくって、さらに本文頁を繰っていくと図1・2、つまり荻田記録にやっとたどり着けることになるのである。

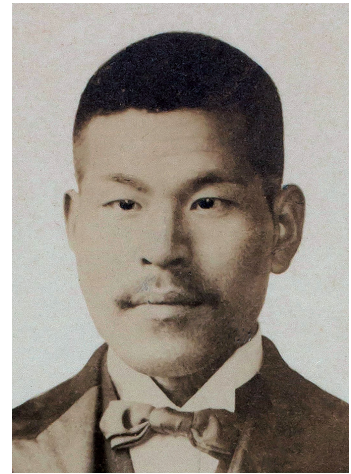
このような緻密な資料集を編んだ荻田とは、どのような人物だったのだろうか。

荻田の人物像と資料

三豊は汽車の出来ぬ前に、伊豫の方へ抜けて見ました。今は故人となった荻田元廣君が案内をせられました。此人の家も知って居ります。惜しい学者でしたが長生をしてくれませんでした。

これは、日本民俗学の開拓者である柳田国男^{やなぎ たくにお}の紀行文「四国の旅」の一節である。柳田は1900年代初め頃から頻繁に各地を旅行しその経験から徐々に民俗学の研究に進んでいくとされているので、2歳年上の柳田と荻田との交流は、共に20代の頃となる。

この時期の荻田は、地元（観音寺市本大町）の小学校や香川県師範学校の教諭として教鞭をとる傍ら、歴史研究に精力的に取り組んでおり、その一端は先の『讃岐史料 雑之一』に収められているある文章から窺える。それは巻頭に収録されている「讃岐史料目録」のあとがきで、この目録は1900（明治33）年〔荻田23歳の頃〕、現在の東京大学史料編纂所で書き写し、閲覧は三上文学博士の厚意によると記している。三上博士とは東大教授で、『大日本古文書』などの刊行を推進した著名な歴史学者の三上参次^{み かみさん}である。



▲図5 荻田元広顔写真

この時の交通事情は、現在のJR東海道本線が全線開通した10年ほど後で、東京・神戸間が約20時間かかっており、さらに観音寺市から神戸までの時間を加えると、東京行きは片道2日余りを要したと思われ、荻田の熱意と行動力が伝わってくる。

このような積み重ねから歴史研究者たちとの交遊関係が広がり、例えば上記の東大では当時大学院に在籍し後に日本史・考古学の分野で活躍する喜田貞吉^{きだ さだきち}とも、柳田と同様に親しくなったようである。

その結果なのか、後に東大から招聘の話がもたらされたようであるが、病気のため赴任はかなわず、1918（大正7）年41歳の若さで亡くなった。

研究者としては基礎研究を終えさあこれからという時の逝去であった。同時代の郷土史家と比較してみると、岡田唯吉は5歳年上で72歳まで生き福家惣衛^{ふけ そうえ}は7歳年下で86歳まで生きており、荻田の短さが際立つ。このため荻田の研究業績は乏しく、岡田、福家と比べると香川における知名度は、故郷を除けば低いのも、致し方のないことである。

荻田の蔵書・調査研究記録・収集考古遺物などは、没後まもなくみや子夫人より鎌田共済会図書館に寄贈された。その数は3,000点余りで、多くが郷土博物館に引き継がれ現在に至っている。

その中には、本稿で取り上げた古墳と同じように現存しない遺跡の記録がいくつも含まれているが、郷土の歴史復元に生かされて来なかったのは残念としか言いようがない。

この状況を改善するためには、まずは資料目録の詳細版作成が当館に課された宿題だと思えてならない。

（館長 大山 眞充）

【引用・参考文献】

- ・ 柳田国男「豆の葉と太陽—四国の旅」『定本柳田國男集』第二巻 筑摩書房 1962
- ・ 一ノ谷公民館『いちのたに』6号 1971
- ・ 瀬戸内海歴史民俗資料館『讃岐青銅器図録』 1983
- ・ 香川県教育委員会他『県道高松王越坂出線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 雄山古墳群』 2000
- ・ 廣瀬永津子「鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭と荻田元広」『郷土博通信』No.3 2014
- ・ 宮武尚美「荻田元廣の研究ノートから—明治時代の古墳調査—」『郷土博通信』No.10 2017



『弘法大師御一代記』について

(表紙解説)

青海波模様の水面を青龍が火焰を散らしながら飛んでいます。その青龍の背に立つ僧侶。手には密教法具の三鈷杵を持ち、黄・緑・青色が散りばめられた柄の法衣の下から青龍の火焰より鮮やかな赤色の衣が翻っています。この絵は『弘法大師御一代記』という真言宗の祖師・弘法大師空海の生涯を記した江戸時代後期(19世紀後半)に刊行された絵入り本の包み紙(元袋)に刷られたものです。今の新書本とそのカバーや帯のさきがけで、刊行当時の状態がわかる珍しいものといえます。

冊子の表紙には、萌黄色の菊紋和紙に書名を記した題箋のみで絵はありませんが(1頁右上写真)、表紙をめくると、弘法大師が開いた高野山の参道図2枚と、高野山の伽藍図(大塔、金堂、西塔、楼門)、そして弘法大師の母が、自身の体内に天竺国の聖人が飛び入る夢を見て大師を身ごもった、という絵1枚が色刷りで入っています(8頁右下写真)。本文中にも単色墨刷りの絵が数多く盛り込まれ、縦18.0cm・横11.9cm・厚さ1.3cmの小ぶりな冊子にして手軽に見て読んで楽しめるように工夫されています。

著者は柳々山人(招祿翁)で、「例言」によると、本書は京都・教王護国寺(東寺)が所蔵する『弘法大師行状絵詞』十二巻(重要文化財)から抜き書きして弘法大師の生涯の概要をまとめたもので、子供たちにわかりにくい部分は省略したと記しています。

生涯を全60話で構成し、それぞれに漢字4文字の標題が付けられています。「神泉祈雨」と題した話では、824(天長元)年の大旱魃の時、弘法大師が天皇の命によって神泉苑(京都市中京区)で雨乞い祈禱を行ったところ、龍王が現れて雨が降り出したということが紹介されています。このように見てみると、本文の内容に即しつつ、水にまつわる数多くの伝説をもつ弘法大師と、水をつかさどる水神(龍神・龍王)を象徴的に描いたのが冒頭の包み紙の絵であることがわかります。

絵を描いたのは、玉蘭齋貞秀(歌川貞秀)。のちに俯瞰的な構図の風景一覧図などを得意として「空飛ぶ絵師」と評された人物です。

版元(出版者)は、江戸日本橋通油町(東京都中央区日本橋大伝馬町)にあった松林堂・藤岡屋慶次郎で、ほかにも『親鸞聖人御一代記』、『西行法師一代記』などの歴史的な人物伝を出版しています。(齊藤 祐司)

※ロビーにて9月まで展示しています。

INFORMATION

■体験講座「鑄造体験してみよう！」

溶かした金属を古代鏡・銅鐸・和同開珎などの型に流し込み、磨いて仕上げる作業を体験します。

2021年7月31日(土)
・午前の部 11:00~12:00
・午後の部 13:00~14:00
14:30~15:30



対象:小学生以上(小学4年生以下は保護者同伴)

会場:鎌田共済会郷土博物館2階講堂

参加費:作るものによって異なります(¥500~1,300)

講師:高松市埋蔵文化財センター職員

■要予約、申込7月1日(木)から、先着各回6名

●電話でお申込み下さい。電話:0877-46-2275

■好評の「御内御用測量下図」実物大パネルは、場所を変え常設展示しています。

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

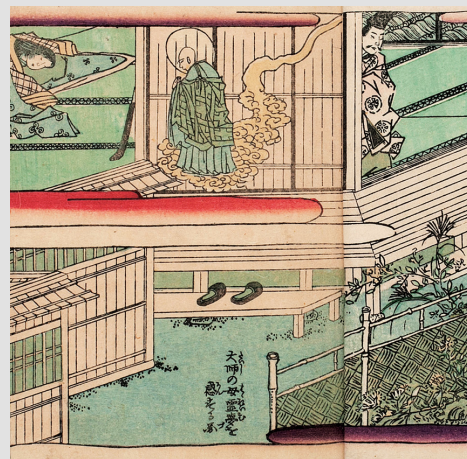
開館時間:午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)

休館日:月曜日/祝日

夏季特別(8月13日~15日)

年末年始(12月29日~1月4日)

入館料:無料



▲『弘法大師御一代記』(部分)